

## 時評

佐藤洋一郎 地球環境学  
総合研究所副所長・教授

3月末は別れの季節。大学などでも、定年を迎えて職場を離れた先生たちがたくさんおられる。それにしても昔は、どの大学にも広告塔とでもいうべき名物教授がいたが、今はめっきり減ってしまった。

K教授もそうだった。通勤は赤のスポーツカー。白い背広にピンクのネクタイ。T教授はど

こへ行くにも和装だった。外見だけを見ると少し近寄りたかったが、講義はむちゃくちゃおもしろかった。出席をとるわけでもなく毎回レポートが課されるわけでもない。それでも教室は満員だった。

そうかと思えばたった一人の受講生相手に淡々と講義を続けるY教授もいた。とにかく話が

## 名物教授の「絶滅」

難しい上、声も小さい。板書はめちゃくちゃ。しかし、いったんはまるど先生の講義はじつに含蓄があった。

いっぽう今はどうか。名物教授はめっきり減った。名物であるより、まずオーソドックスであることが求められているようだ。先生たちは、「授業評価」によって学生たちに

採点される。学生を評価するのが仕事だった先生たちが、いまやその学生たちに評価される。

しかし、評価の項目はといえ「声が大きいか」「板書は読みやすいか」など、首をかしげたくなるようなものもある。「期待される先生像」は、まじめで丁寧で、きちんと授業に出席する学生が褒められる、とい

ったものようだ。

驚くべきことに、いまや「評価」を当たり前のこととする風潮が教授たちの間にも広がっている。評価は授業ばかりか研究面にも及ぶ。研究面では、書いた論文が何人の研究者に取り上げられたかが評価される。注目度が試されているともいえるが、見方によっては

なんと同じ発想をすることが奨励される結果を招いているともいえる。

誰も気づかなかった斬新なアイデアなどは低い評価しかももらえない。没個性化が蔓延している。今は単に点数がつくだけだが、近い将来その点数でボーナスの査定をすることを検討している大学もある。他人と違うと生きにくくなる時代が大学にも

来ようとしている。

こうした背景から、名物教授たちはいまや絶滅危惧種になった。言い換えればどの大学でも教授の授業を聞いても同じになりつつある、ということだ。事業仕分けにかかれば大学の数を減らせといわれかねない状況である。不真面目な先生には大学を去ってもらうのは当然として、しかし、ど

こにでもいるような先生ばかりを揃えることで果たして大学は社会的な使命を果たせるのか。

奇しくも今年には「生物多様性年」だ。生物ばかりか文化の多様性もが失われていると指摘されている。紺屋の白袴ではないが、大学は、鴨やコウノトリなど生物界の絶滅危惧種のことばかり心配する前に、学内の多様性の喪失について考えるべきだと自戒をこめて言いたい。

## 大学内にも没個性化蔓延

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。